

消えたハンター、広がる「猪鹿」被害

過疎・高齢化で拍車 山林DXが人の目代替

野生動物の生息地域が拡大している。江戸時代以降に狩猟で頭数が激減したものの、山あい地域の過疎の影響で活動圏が広がる。シカは2050年に国土の9割に広がる見通しだ。農林業への被害増加が懸念される中、ハンターの高齢化が進み山林に手が行き届かない。ドローンや人工知能(AI)は人間に代わる監視の目になれるか。

シカやイノシシを半減する目標を掲げた。猟銃の所持許可の更新に必要な技能講習を免除する措置を継続したり、市町村をまたいで移動する動物に対して、より広域な都道府県単位で捕獲を推進できるよこした。シカやイノシシがほとんどいなかった東北や北陸などは対策のノウハウが不足しており、獣害が広がる懸念が高まる。長岡技術科学大学の山本麻希准教授は「営農意欲がなくなり、限界集落によって最後のとこめになってしまいう可能性がある」と警鐘を鳴らす。

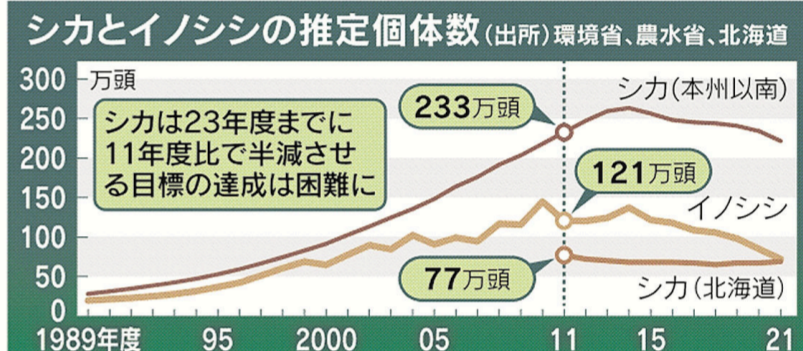
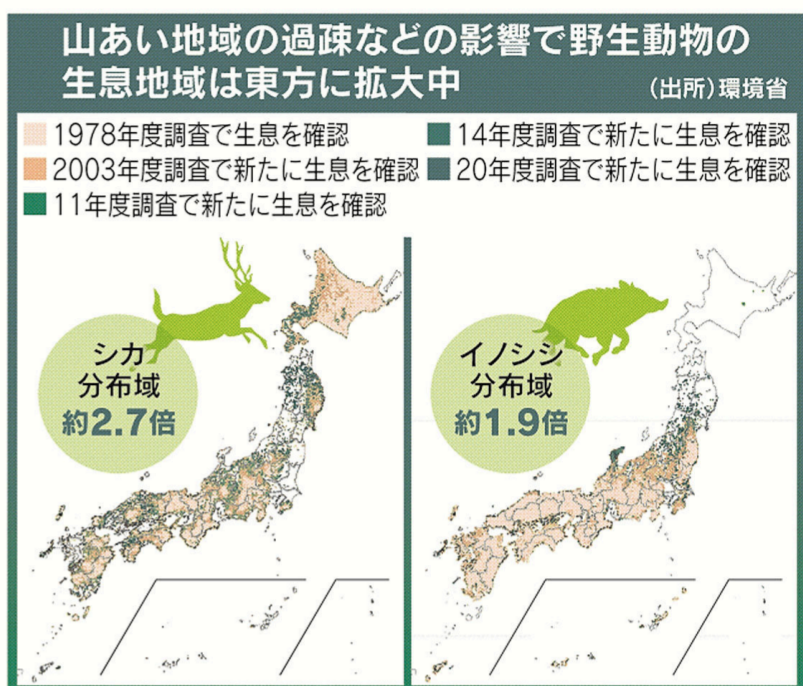
人口減が避けられない中、野生動物の管理体制をデジタル化する。ドローンで撮影した画像をAIで処理し、動物を特定するスカイシーカー(東京・千代田)の平井優次取締役は説明する。

「1920年ごろを最後に記録がなかった茨城県でシカが見られるようになって」。森林総合研究所の永田純子室長は指摘する。2013年に福島・栃木との県境にある八溝山で確認されて以降、シカの目撃情報が相次ぐ。永田氏らが南西部に現れた個体のDNA鑑定を実施した結果、栃木県日光地域のシカと遺伝子型が一致した。若いオスが河川沿いに広がる緑地帯で移動してきた可能性があるという。

かつては全国に生息していたシカやイノシシは江戸時代以降、数が激減した。関東一円では將軍家による狩りが行われたり、明治時代になると豪雪地帯を中心に猟師が農閑期に個人で種族的に狩猟したりした。戦時中はたばこ源として捕獲された背景もあり、東北や北陸、関東の一部ではほとんど見られなくなってきた。

シカ生息分布2.7倍 農作物被害10億円

その野生動物が近年、再び勢力を強めている。環境省が20年度、捕獲位置情報や都道府県へのヒアリングをもとに野生動物の生息分布を調べたところ、シカは1978年度から2018年度までの間に2.7倍、イノシシは1.9倍に分布が広がっていることが分かった。それぞれ国土の7割、6割に生息しているとみられる。



企業や自治体	主な取り組み
企業	スカイシーカー: ドローンを夜間に飛行させ、生息実態を調査。農地の脆弱性の診断も実施。
企業	北陸電力・ほくつう: カメラで撮影した画像をAIで処理し、動物を特定。
自治体	宮城県: 総合警備保障などと連携し、生息域の把握から捕獲までAIやIoT機器を使った実験を実施。
自治体	札幌市: 農家からハンターへの駆除依頼をネット上でできるシステムを道内新興企業と9月に実証実験。

グラフィックス 池田奈央

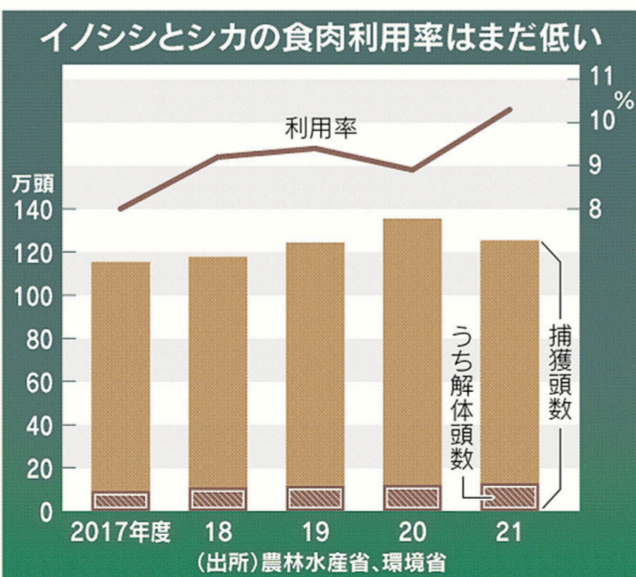
Review 記者から 食肉活用策、品質・供給に課題

捕獲したシカやイノシシなど野生動物の肉を「ジビエ」として有効活用する取り組みが進んでいる。国は認証制度を設けたほか、食肉処理施設の整備やハンター育成を進め、外食やペットフードなど多様なニーズ開拓を推進。豚や牛、鶏に続く「第4の肉」の歴史を目指し、食肉利用を後押ししている。

農林水産省によると、2021年度の野生鳥獣のジビエ利用量は前年度比18%増の2127トンと16年度より7割増えた。ただ、食肉利用される個体はまだ少ない。21年度に食肉処理施設で解体されたシカ・イノシシは計12万9000頭と捕獲された1割にとどまる。課題は食肉の品質や捕獲量の安定だ。野生鳥獣はE型肝炎ウイルスや寄生虫を保有する場合がある。肥育されている豚や牛と違って衛生面や供給量の管理が難しい。さらにハンターや解体業者らの血抜きなど技術に肉質が大きく左右されることも、品質が安定しない原因となる。

野生鳥獣の肉を食用に販売するには地域によって「捕獲後2時間以内」に食肉処理施設に搬入し「野外で内臓を摘出ししない」などのルールが定められている。山奥で捕獲された場合には迅速な運搬が難しい。運搬・解体コストは価格に転嫁され、ジビエの価格相場は牛や豚より高くなりがちだ。

国は25年度までにジビエ利用量を4000トンと19年度比で倍増する計画だが達成は容易でない。(DXエディター 杜師康佑 鬼頭めぐみ)



政府は半減目標の達成時期を28年度に先送りした。今後も野生動物のすみエリアは増加の一途をたどる。政府は半減目標の達成時期を28年度に先送りした。今後も野生動物のすみエリアは増加の一途をたどる。政府は半減目標の達成時期を28年度に先送りした。今後も野生動物のすみエリアは増加の一途をたどる。

■ 技術的な鳥獣捕獲強化対策。シカやイノシシによる農作物被害拡大を背景に環境省と農林水産省が2013年度に打ち出した。11年度を基準年に23年度までにシカとイノシシの生息頭数を半減する目標を掲げた。ハンターの銃猟のほか、行政職員や農家がワナをしかけて捕獲するなどして結果、捕獲数は22年度に約130万頭と13年度から3割以上増えた。ただ、山あい地域の過疎が進み、人間を警戒することなくエサ場を求めてシカを中心に移動範囲が広がる生息域は抑制できなかった。農作物への被害以外にも野生動物が人間にけがをさせたり、自動車と衝突したりする危険性が高まっている。住宅地に動物が現れ、家庭ゴミをあさる光景が日常になる可能性もある。